つなぎ手の
みなさん

2016	2017
2018	2019

台風接近のため
中　止

神舞の舞手や行事の担い手が少なくなり、周囲の関心も薄くなっていたナゴシドン。「町内外からひろく参加者を募ることで状況を変えよう。参加者にはただ神舞の振りを覚えるだけでなく、岸良という地域のことも知ってもらおう」そんな考えのもと「ナゴシドンのつなぎ手実行委員会」を2016年に組織しました。

それから4年。毎年、インターネットや新聞記事、ラジオなどを通じて様々な方が興味をもってくださいます。1年目はよそものに限定して参加者を募りましたが、地域からの声を受けて、2年目からは岸良でも参加者を募っています。よそから来たお兄さんお姉さんたちが神舞をする姿や、裏方としてお手伝いをする姿に、地元の子どもたちはあこがれを抱き、手を挙げる人が出てきています。

「つなぎ手」という言葉には、舞手やお手伝いとして参加してくださる方はもちろん、私たち実行委員や、この活動を応援してくださる地域のみなさん、ナゴシドンを見に来てくださるみなさんも、実は含まれています。ナゴシドンをきっかけに、まずは岸良の人に岸良の良さを再発見してもらいたい。ナゴシドンをきっかけに、できればよその人にも岸良を知ってもらいたい。そしてひとりひとりが、何らかの形で岸良のことをつないでいってもらえたら…。

4年経っても、まだその道の途中です。

盛夏を彩る伝統行事「ナゴシドン」

山と海に囲まれた肝付町岸良地区で受け継がれてきたお祭りです。全国的に行われている「夏越の大祓（夏越祭）」が岸良の風土の中で変化してきました。盛夏の白い砂浜の上で、青々とした山と海、真っ赤な神面三体を背に、およそ600年の歴史がある神舞を披露するのが特徴です。

平田神社創建の起源は不明ですが、現存する最古の記録は1407年（応永14年）に肝付氏第11代兼元が社殿を修造した棟札です。ほかにも同様の記録があることから、領主より大切にされてきたことが想像され、神舞もその頃から伝承されていたのではないかと考えられます。

担い手が減り、行事は簡略化されるようになりましたが、五穀豊穣と地域安泰への祈りは今も込められています。

《「ナゴシドン」の大まかな流れ》

- 平田神社の祭神を神面三体にうつして、岸良海岸へ連れてゆく。
- 岸良海岸で神面三体に海水をかけることで、海神の依り代とする。
- 神面三体を中心に砂浜に祭壇をつくり、大祓詞を述べ、神舞を奉納する。
  ⇒五穀豊穣と地域安泰を祈願する。
- 観客も一緒に茅縄くぐりをおこなう。
  ⇒それまでの半年の穢れを落とし、その後半年の健康と厄除けを祈願する。
- 平田神社に戻り、もとのご神体に祭神をかえす。

平田神社

浜下り

2019年
練習から当日まで

練習（十二人剣舞）

リハーサル（浦安の舞）

8月13日の岸良海岸

今年の参加者は、「神舞の舞手」が10名と「当日のこどい」が7名でした。今回から宿泊を参加者自身で手配していただくことになったため、はたしてよそから参加してくださる人がいるのだろうか…と不安を抱いていました。その結果は、とてもありがたいものでした。

舞手は、浦安の舞に高山地区と山口県から2名、山の神舞と薙刀舞は昨年と同じ岸良出身の少年と青年が参加。そして十二人剣舞は2年目と3年目の岸良の子どもたちに加え、高山地区と鹿屋市から初参加者が加わり、合計6名に。8月9日のオリエンテーションを経て、練習に励んでくださいました。

こどいのオリエンテーションは13日に予定していましたが、参加者の中にはその前から泊まりがけでお手伝いに来てくださった方もいました。そして、4年連続で来てくださる方々も。

こうしてせっかく集まってくださった4年目でしたが、14日のナゴシドン当日をめがけて台風10号が接近。13日午前の時点で波が高く小雨が降っていたため、リハーサルは砂浜ではなく駐車場の片隅でおこないました。そして同日午後のこどいオリエンの際、翌日荒天になることを見越して、神舞は岸良中学校体育館で行うことに決めました。こどいのみなさんはその準備に奔走してくださいました。

しかしその日の夜、台風の進路予報とその時点での雨風の強さを考慮して、中止を決定しました。「雨でも雷でも中止になったことはない」と言われるナゴシドンですが、安全を第一に考え、判断しました。

せっかく、一生懸命練習してくださった舞手のみなさん。準備を手伝ってくださったこどいのみなさん。遠路はるばる来てくださったみなさん。応援してくださった地域のみなさん。写真にさえのこせなかったひとりひとりの顔を思い浮かべると、言葉にならない思いでした。

町指定無形民俗文化財「平田神社の神舞」

平田神社の神舞は肝付町高山地区の四十九所神社から伝えられました。文化財に指定されている8つの神舞のうち、今も受け継がれているのは3つのみ。以前はさらに数がありましたが、いつの頃からか途絶えてしまいました。

伝習されたくわしい経緯や途絶えた神舞の詳細は、資料が焼失しているため不明です。戦後は行事やお祝いごとの折に神舞を夜通し披露されていたそうです。

《「平田神社の神舞」の名前と意味》

① 座着舞（途絶）
② 鬼神舞（途絶）
③ 山の神舞 … 勝利の風をふかせる
④ 田の神舞（途絶）
⑤ 四方鬼神舞（途絶）
⑥ 薙刀舞 … 悪魔退散を祈る
⑦ 十二人剣舞 … 荒ぶる神をはらう
⑧ 岩戸舞（途絶）
◎ 浦安の舞 … 国の平穏を祈る
継承可能な「平田神社の神舞」が少なくなってきたことから、近年披露されるようになりました。

神舞とナゴシドンの変遷

- ??年　四十九所神社から神舞を伝習する。
- 1407年　肝付氏11代兼元が神社を修造した記録がある岸良氏・肝付氏の時代にはほかにも修造が行なわれた記録があり、領主の崇拝があつかったことが分かる。
- 1950年　薙刀舞が途絶える。

つないで4年
どこへ行こう？

1年目の参加者の中に、こんな言葉をのこした人がいます。「よその人間たちに神舞をまかせるという形は、種をまくようなものだと思いました。来年再来年、まったく同じメンバーが集うことは難しいのかもしれないけれど、たとえ誰かが戻ってこなくとも、ナゴシドンを知っている人間はその分全国に散っていき、新しい誰かがナゴシドンを知る。そうしてどんどん種をもつ人が増えていくと、ある日突然、芽吹く日がくるかもしれない。」

この言葉のとおり、次の夏にまた戻ってくる人がいたり、新しく参加する人がいたり、ふと岸良を訪ねてきたり、別のご縁をもたらしてくれたり…。ありがたさと新鮮さが絶えない4年間でした。

年によって変化するのは参加者だけではありません。ナゴシドンの舞台、岸良という地域の状況もまた毎年異なり、参加者を受け入れるメンバーや体制はいつも同じようにいくわけではありません。あらゆる場面で担い手が限られている地域で、ひとつの行事を継続する、つないでいく。その難しさもまた、毎年感じています。

それでも毎年、変わらずに応援してくださる人たちがいて、参加したいと手を挙げてくださる人たちがいる。これが何よりの励みです。

5年目以降、どうすれば長く続けられるのか、どうすればいい方向へうまくつながっていくのか、試行錯誤は続きます。

この年表は、次の資料から判明した事柄を要約し、記載しています。
内之浦町誌編纂委員会『内之浦町誌』鹿児島県肝属郡内之浦町役場・内之浦町教育委員会、2003.03／過去の南日本新聞記事／旧内之浦町町報／肝付町町報／平田神社宮司や神官、神舞の教え手、岸良地区住民の語り　など

- 1964年
  旧内之浦町の無形民俗文化財に指定される（現在：肝付町指定無形民俗文化財）。
- 1972年
  十二人剣舞が地元の小学生に伝承される。
- 1981年
  十二人剣舞が途絶える。
- 1983年
  この時すでに、浜下りは省略されていた。
- 1988年
  山の神舞が新たな舞手へ継承される。
- 1995年
  薙刀舞が新たな舞手へ継承される。
- 1996年
  十二人剣舞が子ども3名により復活する。
- 2011年
  山の神舞や十二人剣舞は舞手の不足のため、薙刀舞は舞手の高齢化のため披露が難しくなってきたことから、浦安の舞が取り入れられる。
- 2012年
  十二人剣舞が地元中学生6名により披露されたのを最後に途絶える。その後披露されるのは山の神舞・薙刀舞・浦安の舞のみとなる。
- 2016年
  「ナゴシドンのつなぎ手」が始まり、舞手や運営の担い手をひろく募るようになる。
  これ以降は、毎年地元や全国から参加者が集い、浜下りや神舞奉納をおこなえている。